



神戸大学経済経営研究所

Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University

■コラム

RIEB ニュースレターNo.267 2025 年 3 月号

## 社会に役立つ研究ではなく、研究を社会に役立たせる

神戸大学 経済経営研究所  
准教授 近藤 恵介

クロスアポイントメント制度のもと、神戸大学経済経営研究所にて貴重な経験を積ませてもらっていることに感謝しつつ、これまでの経験から得られたことを本コラムで共有したい。

神戸大学に来てからよく聞くようになった言葉がある。それが、「社会実装」という言葉だ。私のもう一つの所属先の独立行政法人経済産業研究所では、「エビデンスに基づく政策形成」、いわゆる EBPM についてはよく聞いてきたが、社会実装という言葉に触れる機会はあまり多くなかった。今でも社会実装という言葉が使われることはあまりないと思う。一方で、神戸大学の様々なイベントに参加するようになって社会実装という言葉をついたび耳にしてきた。

社会実装とは何なのか、もちろん過去に聞いたことはあったものの、私の不勉強なこともあり特に調べることもなく、なんとなく「社会実装＝社会の役に立つ研究」程度の認識でいたときもあった。しかし、ある経験をきっかけに、社会実装について自分なりに整理してみようと感じ、アンテナを張って過ごすようになった。すると、いろんな出来事がつながり始めた。そのときの経験をきっかけに、自分の研究の幅が大きく広がったように思う。

私が経験したあるきっかけとは、クロスアポイントメント初年度の 2022 年度のときである。神戸大学で経験を積ませてもらっている以上、新しい視点から研究成果を生み出すことができればと思っていたところ、神戸市が独自に行う「大学発アーバンイノベーション神戸」という若手研究者向けの研究助成を知った。神戸大学の研究者となったことで応募資格を満たすことになったため、人流データに関する研究テーマで応募したところ、幸運にも採択していただくことができた。

その年度末の 2023 年 2 月 9 日のことである。大学発アーバンイノベーション神戸の成果報告会が、神戸大学にて行われた。私は登壇者でもなく、2022 年度採択の研究紹介のポスター展示がされていただけであったが、せっかくの機会なので東京から神戸に向かい、現地でイベントに参加することにした。

プログラムを見ると、成果報告だけでなく、「地域課題解決に向けた産官学連携の在り方」

と題した神戸市・久元市長と神戸大学・藤澤学長を交えた討論会もあり、どのような討論をなされるのか現地で聞けるのを楽しみにしていた。その様子は神戸市公式 note[1]や神戸大学の広報[2]でも紹介されている。

神戸市公式 note[1]から引用すると、久元市長からは「成果報告書を作りっぱなしではいけない。せっかく素晴らしい研究をしていただいたのだから、まず市役所の関連部署で内容を理解する。経済界にも協力いただき、それを社会に実装するのが大切」、藤澤学長からは「研究の意義を知っていただき、最終的には政策につながらう嬉しい。地域の皆さんに還元されることが一番の社会実装」との発言をなされていた。

ここでも久元市長と藤澤学長から気になっていた「あの言葉」を聞くことになった。ただし、現地で直接話を聞いてみて、社会実装という言葉の解像度が上がったような感覚があった。「社会実装＝社会の役に立つ研究」という意味だけではないように感じたからである。そこで、「社会実装」について、当時、自分なりに調べてみたことをこの場で簡単に整理したい。

「社会実装」について調べてみると、同じような疑問を持たれた方がおり、既に文献としてもまとまっていた[3]。金澤(2018)によると、2013 年以降から使われ始めたようで、国立研究開発法人科学技術振興機構の議論がきっかけのようである。2013 年に閣議決定された科学技術イノベーション総合戦略で使用され、2016 年に閣議決定された第 5 期科学技術基本計画でも多く使われている。海外の流行りの言葉を輸入してきたのかと思ったら、日本独自の用語として生まれたようである。

そこで、さらに「社会」と「実装」という 2 つの言葉に分け、その出自についても調べてみた。

研究者として研究活動をするにあたり、「社会」との関係性は重要であることは言うまでもない。1999 年にハンガリーで開催された ICSU/UNESCO 世界科学会議における宣言（ブタペスト宣言）では、4 つの「科学の意義」のうちの 1 つに、「社会における科学と社会のための科学（Science in Society and Science for Society）」が含まれている[4]。日本学術振興会の資料[5]にもあるように、「社会」との関係について、常に意識しながら私自身も研究を進めている。

一方、「実装」という概念は、研究者生活を続けてきても、あまり接する機会はないように思われる。調べてみると、「実装科学(implementation science)」という分野があるようだ[6]。島津他(2021)によると、「エビデンスに基づく介入を『どのように』すれば実装できるのか、という問いに対する知識体系を構築する学問領域」とのことである。おそらく、社会実装を理解するうえで、この「実装」の考え方に何かヒントが隠されていそうだ。

実は、「社会実装」という言葉が多用されるのと同時期に、ある出来事が社会に衝撃を与えていた。人文社会学系の不要論争である。当時を振り返ってみると、ことの発端は、この「社会実装」という言葉にあったのではないか。偶然にも時期的には一致する。

「社会実装＝社会の役に立つ研究」という理解が先行してしまったことで、「社会の役に立たない研究＝不要」論という安直なメッセージにつながってしまったのではないだろうか。もしくはそのような意図はなくても、そう受け止められてしまう可能性が高い伝え方だったのではないだろうか。もちろん、当時の背景や意図は分からず、これは私の憶測であり確証はない。

「社会実装」を調べてみた結果、私がたどり着いたゴールは、「社会に役立つ研究」ではなく、「研究を社会に役立たせる」という使命感を持って研究を行うことである。

個人的な見解として、国が事前に社会の役に立つ・立たないという姿勢で研究を制御すべきではないように感じている。そもそも、人間の純粋な知的好奇心から生まれる研究が、社会の役に立つ・立たないというのは、事前には誰も分からない。

もちろん「社会の役に立つ研究」の意図を完全に否定するわけではなく、ニーズ（needs）とシーズ（seeds）のバランスが重要である。社会で喫緊の要請（ニーズ）のある研究テーマに取り組むことも求められる。ただし、「社会の役に立つ」という価値判断によって、知的好奇心（シーズ）に基づく研究活動のすべてが制限されてしまうことは、長期的には社会にとって大きな損失なようにも感じる。

当然のことながら、研究者として、研究の原資として税金が投入され、社会に支えてもらっていることの責任は持たなければならない。では、どうすればよいのか。その答えが、社会実装であり、どのような研究であっても、いかに研究成果を事後的に社会に役立たせるのかという使命感のもとでの取り組みなのだと感じている。これは、久元市長の「成果報告書を作りっぱなしではいけない」ということにつながり[1]、「社会における科学と社会のための科学（Science in Society and Science for Society）」ともつながる[5]。

研究の潜在的な価値は、研究者本人さえも気づいていないことがある。別の研究者であったり、企業であったり、政策担当者であったり、一般市民であったり、他者が研究成果の価値に気づくことがある。それが結びつくことでイノベーションが生まれ、課題解決につながることもある。すぐにイノベーションにつながることもあれば、何十年も経ってからイノベーションにつながることもある。

もちろん、その分野の高度な知識を有していなければ、第三者が研究成果を理解することは難しい。だからと言って、研究者本人のみが社会実装をするにも限界がある。そのためには、

博士号取得者が社会で活躍できる裾野の広さが、「社会実装」の土台として求められるのではないだろうか。日本では、まだそのような土台となる環境が十分整っていないと思われる。国が介入すべきは、この土台作りのために有効な政策をデザインすることにあると思っている。

以上、最後のまとめとする。社会実装という言葉を引きかけに調べ始めたところ、この言葉の曖昧さが、実は、人文社会系の不要論争の引き金になっていたのではないかという仮説を持つに至った。したがって、社会実装とは何かに答えることは、人文社会系の不要論争に対する答えでもあるように感じている。私の答えとしては、「社会に役立つ研究」ではなく、誰がどのような研究に取り組んでいたとしても、「研究成果を社会に役立てる」という使命感を持つことが社会実装の本質ではないかと思った次第である。

#### 謝辞

「社会実装」という言葉をきっかけに、私の唐突な問題意識について、2023年5月に経済経営研究所の若手研究会にて藤山先生をはじめ同僚の先生方には議論にお付き合いいただいたこと大変感謝しています。そこでの議論が、より深い洞察を与えてくれることにつながっています。

#### 参考文献

- [1] 神戸市公式 note、「神戸市が、大学の若手研究者に“投資”する理由」、2023年2月9日掲載、<https://kobe-note.jp/n/n4b3d5aaa248d> (2025年3月9日確認)
- [2] 神戸大学「大学発アーバンイノベーション神戸成果報告会を開催」、2023年2月15日掲載、[https://www.kobe-u.ac.jp/ja/announcement/2023\\_02\\_15\\_01/](https://www.kobe-u.ac.jp/ja/announcement/2023_02_15_01/) (2025年3月9日確認)
- [3] 金澤良弘、「研究成果の社会実装と大学の役割」、『日本大学知財ジャーナル』、Vol. 11, pp. 17-24、2018年
- [4] 文部科学省、「参考資料2 科学と科学的知識の利用に関する世界宣言（1999年7月1日採択）」、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1298594.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1298594.htm) (2025年3月9日確認)
- [5] 日本学術振興会、「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－」、2015年、<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf> (2025年3月9日確認)
- [6] 島津太一、小田原幸、梶有貴、深井航太、今村晴彦、齋藤順子、湯脇恵一、立道昌幸、「産業保健における実装科学」、『産業医学レビュー』、Vol. 34, No. 2, pp. 117-153、2021年